

# 下仁田町で大切にしたい植物

## Important plants in Shimonita Town

里見哲夫\*

Tetsuo Satomi

キーワード：下仁田，希少植物，ミョウギシダ

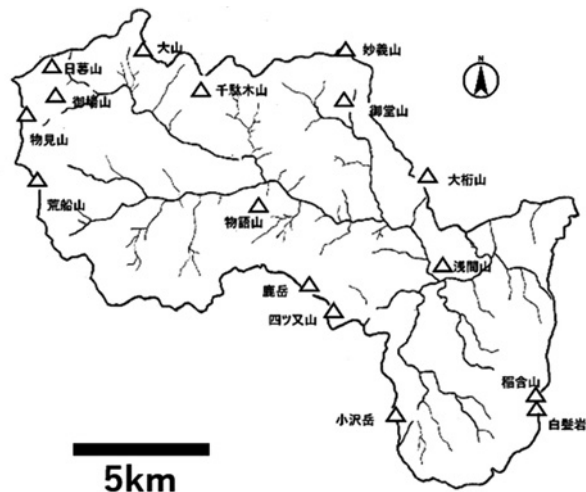
Key words : Shimonita, endangered plants, *Polypodium someyae* Yatabe

### はじめに

下仁田町は、1872（明治5）年に町となり、1955（昭和30）年に周辺4ヶ村が合併したのが現下仁田町である。群馬県の西南部に位置し、四方を山に囲まれた中山間地の農村地帯で、町役場の位置は東経138°47'32"，北緯36°12'33"，標高261 mに位置する。町域は、東西に17.50 km，南北に10.25 kmと東西に長い。総面積は188.27 km<sup>2</sup>で総面積の87%を山林・原野が占めている。町の東は富岡市に接し、古くは、中山道脇往還下仁田道として、小坂坂峠道が下仁田方面への唯一の街道となっていた。他の3方は標高1000 m余の山々に囲まれている。農産物としては下仁田ネギが広く知られている。

町の西から東に荒船山を源とする鑛川とその多くの支流が流れ、一帯は河岸段丘によるきわめて狭い平地がみられ、住居や農地となっている。従って、山林部まで耕した農地が点在している。町域には「ぐんま百名山」が11座あり訪れる人も多い。年平均気温は12.1℃，年間降水量1546 mm，降雪は年2～3回程度で比較的穏やかな気候の地といえよう（第1図）。

現在は国道254号が、また上信越自動車道も走り下仁田インターチェンジがあって交通の便は良い。



第1図 下仁田町の地形図

人口は少子高齢化と人口の流出に伴って、合併当時は22000人であったが、今は6000人台である。

### 自然環境

#### 〈地質〉

下仁田地域は地質学上著名で、早くから研究が進められ、地質関係の論文も多い。2007年には跡倉クリッペ根なし山が「日本の地質100選」に選ばれ、2011年には「下仁田ジオパーク」の認定を受けた。ジオサイトの青岩公園（御荷銚緑色岩）、跡倉

クリッペ、大桑原の褶曲、宮室の逆断層、川井の断層、下仁田層の化石、はねこし峡等も活用が図られ、地域活性化に一役かっている。

また2010年には荒船風穴が国指定史跡「荒船・東谷風穴蚕種貯蔵所跡」に、さらに2014年には世界文化遺産に登録されている。

〈植物〉

地形・地質の影響もあって興味深い植物がある。秩父中古生層の分布域の稲含山、奥栗山溪谷一帯にはチャートの地形がみられ、岩場にはイワタケが着生し、周辺にはアセビ、ヤマグルマ（トリモチノキ）がある。青倉の石灰岩地には、好石灰岩植物のイワツクバネウツギがある。また、妙義山には火山活動の影響を受けて変異した植物がみられ興味深いものがあり、ミョウギ名を持つ植物が6種ある。近年、ブコウマメザクラ、ケブコウマメザクラ、ミズコナラ（ミズナラ×コナラ）等を記録している。また、1887（明治20）年創設した日本最初の洋式高原牧場の神津牧場では1940（昭和15）年に、ニコゲヌカキビが日本初の外来種として記録された。

第1表 下仁田の森林

下仁田町の森林構成（民有林） 下仁田町森林組合2021資料  
2020/4/1時点森林簿による

区分	樹種		割合 (%)
人工林	スギ	5,651.22	77.72
	ヒノキ	1,126.87	15.50
	マツ	203.31	2.80
	カラマツ	214.74	2.95
	クヌギ	3.69	0.05
	コナラ	19.38	0.27
	ニセアカシア	9.35	0.13
	その他広葉樹	42.85	0.59
	小計	7,271.41	100.00
天然林	クヌギ	10.46	0.20
	その他広葉樹1	5,307.31	99.74
	その他広葉樹2	3.50	0.07
	小計	5,321.27	100.00
その他	更新困難地・竹林等	155.29	100.00
	小計	155.29	100.00
計		12,747.97	

下仁田町総面積 18,838 ha (188.38 km<sup>2</sup>)  
民有林面積 12,748 ha  
国有林面積 3,638 ha

〈森林構成〉

町を一望するとスギ林が多いのに気づくと思う。森林原野の状況について触れてみると、町の総面積の87%が森林原野で、その内の約88.5%がスギの植林地である。国有林 3,638 ha、民有地 12,748 ha（国有林も含む）。資料は町森林組合（2021）の提供による。この数字から見てもスギがいかに多く、広葉樹林が少ないかが分かる（第1表）。

下仁田の広葉樹林の概要

町の広葉樹林の現況を見ると、河川沿いにわずかに照葉樹林が見られる。標高 1000 m 付近がクリ・コナラ林、その上部はミズナラ林である。以下、それぞれの樹木と草本類の概況を記す。

〈照葉樹林〉

照葉樹林はわずかに鏑川沿いと周辺の標高 200 m ~400 m の一部に点在しているに過ぎない。多くは、不通溪谷からはねこし溪谷、川井山、下仁田市街地から本宿にかけての鏑川沿いに点在している。主な樹種としてシラカシ、アラカシ、ヤブツバキ、シロダモなど、低木にアオキ、シュロ、マンリョウが、小坂坂峠道付近にわずかにモッコクが生育している。ナンテン、チャノキは栽培地から逸出したものである。草本層は、ヤブコウジ、ナガバジャノヒゲ、ヤブラン、シュンラン、マメヅタ、つる植物にキヅタ、テイカカズラ、フジ等で、一部にイタビカズラがある。シダ類のヤマクラマゴケは普通は 800 m 附近に生育している。

〈クリ・コナラ群集〉

クリ・コナラは、主に標高 200 m ~1000 m 付近で見られる。戦後のスギ・ヒノキ等の植栽によって、その面積は減少した。かつてはクリは薪炭材、建築材、屋根葺材としての需要が高かったが、近年は建材や薪炭材としての利用がなくなった。木々が生育する中、活用が減少した場合、その後の措置が問われよう。また、里山にはウルシが植えられてウルシ液の採集が行われたが、今はウルシは伐採されて影を失った。江戸期には幕府の命令で植栽が奨励された記録がある。その他、所々にススキ群落があ

り、屋根葺や炭俵等に使用したが、これも需要が全く無くなり放置され、ここに生えていたキキョウ、オミナエシ等は全く姿を消してしまった。その他、スギ・ヒノキ等の植栽によって、下層に見られたカタクリやシュンラン等も姿を消し、見られる個所はごく少ない。秋にはクリ拾いでにぎわった山も、今はかえり見る人はいない。

各山の尾根一帯には、アカマツ林があり、その下部一帯はツツジ群落である。特に4月～5月にかけてミツバツツジ、トウゴクミツバツツジ、ヤマツツジ、アカヤシオ、ウラジロヨウラク、コヨウラクツツジ、サラサドウダン、アブラツツジ、ホツツジ、ヒカゲツツジ、コメツツジ等の花が次々と咲き誇る。バイカツツジは少ない。荒船山・神津牧場等にはレンゲツツジが咲いたが、荒船山はミズナラの生育によって上部が覆いつくされて花が見られず、寂しい現況である。ツツジ類は陽樹で日照の多いところを好む。標高 1000 m 余の一部にアズマシャクナゲが見られる。また、低山や岩場にあったオオヤマツツジやシロバナミツバツツジは抜き取られて全く姿を消してしまった。その他、問題はシカの食害である。樹木、野草の被害が多くみられ、裸地化している箇所もある。

第2次世界大戦後、建築材の需要が多く、林業の花形時代もあった。広葉樹が伐採され、スギ・ヒノキの植栽率は全国的に高まりを見た。植栽後すでに60余年が経過しているが、やがてまた伐採期を迎える。問題はその木材の需要と販路、またその後の植栽である。果たして後継者が積極的に山への関心をよせるかどうかの問題となろう。今後の林業行政は多難である。

#### 〈ミズナラ・ブナ帯〉

標高 700 m ~ 800 m 付近よりブナ、ミズナラ、カジカエデ、オオヤマザクラ等が見られる。白髪山近くにはダケカンバの小群落がある。この付近一帯にはアセビ群落もある。アセビの分布は南牧川の西南部で、西牧川すじには見られない。稲倉山登山道入り口近くにはオオモミジガサがあったが、現在は姿を消してしまった。群馬県ではこの場所のみの貴重な記録であった。

妙義の岩場にはアカマツ、ツガ、ヒノキ、ネズミサシ、ジゾウカンバ、ナナカマド、ナンキンナナカマド等がある。ミズナラとコナラの接点には、ミズコナラ（ミズナラ×コナラ）が生育している。妙義山一帯には、火山活動の影響で変化したと思われる植物が生育している。

近年、ブコウマメザクラ、ケブコウザクラ等を発見した。

### 下仁田で姿を消した植物

戦後の高度成長やそれに伴う開発と、森林原野の管理不足や盗掘等によって姿を消した植物の数は多い。主なものはシロバナミツバツツジ、オオヤマツツジ、フクジュソウ、クマガイソウ（第2図 口絵1-⑤）、アツモリソウ（第3図 口絵1-⑥）、ムカデ



第2図 クマガイソウ



第3図 アツモリソウ

ラン、ムラサキアズマギク、イブキジャコウソウ、オキナグサ、キキョウ、オミナエシ、オオモミジガサ、カイジンドウ、ヒモカズラ等である。野草ブームによって姿を消したものもあり、また、シカの食害も大きな問題となっている。

### 下仁田で発見、記載された植物

1887（明治20）年にミョウギシダが発見されて以来、次々と妙義の名のついた植物が発見された。群馬県における植物研究の最初の地は妙義山である。中央の研究機関に残る植物標本で最も古いとされているのが1886（明治19）年のもので、この中には妙義山のものも含まれている。その要因は交通の便によるもので、信越線が横川まで開通したのが1885（明治18）年である。ミョウギシダが発見されたのが1887（明治20）年で、その後次々と妙義の名の植物が発見された。下仁田で発見された植物は以下のとおりである。

- a. ミョウギシダ（ウラボシ科）
- b. ミョウギカラマツ（キンポウゲ科）
- c. ミョウギモミジカラマツ（キンポウゲ科）
- d. ミョウギコザクラ（サクラソウ科）
- e. ミョウギトリカブト（キンポウゲ科）
- f. ミョウギシャジン（キキョウ科）
- g. ツルビランジ（ナデシコ科）
- h. オオバナポントクタデ（タデ科）

以上妙義山

- i. シロバナクサシモツケ（バラ科）
- j. ニコゲヌカキビ（イネ科）
- k. キレバノジスミレ（スミレ科）
- l. ベニマメヅタラン（ラン科）
- m. クモマナズナ（アブラナ科）

h・i・k～mは著者が発見した植物である。

### 下仁田で注目すべき植物

下仁田で注目すべき植物について、その経緯等を記述する。

#### 1. ニコゲヌカキビ（イネ科）

*Dichanthelium ocuminotum* (Sw.) Gould et C.A.Clark Subsp. ocuminotum

神津牧場は1887（明治20）年に創設、飼料として外国より牧草の種子を導入した。その牧草種子中に混入した草の種子によって外来種が入ってきた。1940年に日本で最初に見つかったのがニコゲヌカキビである。観光面でも賑わいを見せているため、近年は新顔の外来種が数を増している。

#### 2. フモトミズナラ（ブナ科）

*Quercus serrata* Murray subsp. mongolicoides H. Ohba

第4図 口絵1-④



第4図 フモトミズナラ

「桐生市植物誌」（佐鳥 1981）はモンゴリナラを記した。モンゴリナラについては、「牧野新植物図鑑」（牧野 1989）には記載がない。「日本の野生植物 木本Ⅰ」（佐竹 1989）によると、「モンゴリナラは、モンゴル・中国東北・ウスリー・アムールなどに分布する。かつて北海道や本州（東北地方）に自生するといわれたが、これはミズナラとカシワの雑種カシワモドキの誤認と考えられ、真のモンゴリナラは日本には産しない」と記している。上記のようにモンゴリナラには両論があり、突如話題となった。

その後、富岡市の神成山にも同種と思われる一種が、続いて下仁田でも同様の種が発見された。しかし分布域は標高 200 m～300 m であり、カシワモ



ドキはミズナラの分布域であることからまた混乱が生じている。戸惑いながらも「日本の野生植物 木本Ⅰ」(佐竹 1989)を参考としていた。そんな矢先に、2006年、大場秀章が本種をコナラ属フモトミズナラ *Quercus serrata* subsp. *mongolicoides* と発表した(岩槻ほか 2006)。ここでまた学者間での食い違いが生じているが、フモトミズナラ説に賛同する学者・研究者は少ない。分布域を調べると、本種の分布は愛知県の豊田市と東海東部の一部と北関東の一部に隔離分布する。北関東では群馬県の一部と栃木県の一部に隔離分布する。群馬県では桐生市周辺、富岡市神成山一帯、下仁田町の中小坂～浅間山周辺である。中小坂から富岡市神成山にかけては連続的に分布している。著者は大塩湖周辺、吉井～観音山丘陵、藤岡市金井等の一部で確認しているが、詳細な調査はしていない。分布域がこのようにごく一部に限られているため、分布域にいる者としては、早急に明確な種名が出るのを待っている。

下仁田町のコナラ属を調べるとフモトミズナラ、テリハコナラ、ナガミコナラがある。その他ナラガシワ(カシワナラ)、コガシワ(カシワ×コナラ)等がある。ジオサイトの一部にはナラガシワ、コガシワが生育している。また、妙義山のミズナラとコナラの接するところにはミズコナラ(ミズナラ×コナラ)がある。

### 3. ザゼンソウ(サトイモ科)

*Symplocarpus renifolius* Schott ex Tzvelev

第5図 口絵1-②

サトイモ科のザゼンソウ(座禅草)は、花序のようすが座禅をしている僧に似ているところから命名された。水湿地に生える大型の多年草で、悪臭を発する。分布は本州の中部から北の湿地で、群馬県内の北部では各所で見られる。赤城山にもあるがそれより南では知られていなかった。

1955(昭和30)年に下仁田町青倉の林道開発時にザゼンソウを確認した。地元の方の話では、広い範囲に多数自生が見られたとのことである。一帯を調査すると、山裾の水のしみだしているスギ林中に生えていた。その他、沢沿いの湿地にも生えている。



第5図 ザゼンソウ

スギ植林当時のザゼンソウがどうであったか不明であるのが残念である。その際、消えていったものもあるようだ。現地は群馬県の西南部の桑本・土谷沢地区で、標高は500m付近である。近隣では秩父、山梨の一部にも分布するが、南限に近いもので、分布上大変興味深い。一部の自生地を町の天然記念物に指定している。自生している箇所を調べると、沢沿いに小苗も見られる。

### 4. ブコウマメザクラ(ブコウタカネザクラ)

*Cerasus incisa* (Thunb) Loisel. var. *bukosanensis* (Honda) H.Ohba

ブコウマメザクラは、秩父の武甲山で初めて発見された。1936(昭和11)年松山庫三が採集し、本田正次がタカネザクラの一変種ブコウタカネザクラと命名した。1953(昭和28)年原寛はマメザクラ系の変種ブコウマメザクラと改名した。その後、秩父の植物研究家守屋忠之がブコウマメザクラの一変種ケブコウマメザクラ(チョウジザクラ×ブコウマメザクラ)を、秩父地方の石灰岩の分布域で発見し、特産と発表した。1950年に古瀬義が軽井沢に近い高山(1084m)でブコウマメザクラを見つけて注目をあびた。里見らは1978～1983年にかけての叶山開発に伴う自然環境調査で、二子山、叶山及び周辺

でブコウマメザクラを記録した（叶山自然環境調査会 1984）. 2003年には里見・神宮開は稲含山(1370 m)でブコウマメザクラ、ケブコウマメザクラを発見したが、未発表であるので、ここで発表する。発見地は秩父中古生層の緑色岩分布域である。同年里見は、妙義山の尾根部の凝灰角礫岩地でブコウマメザクラ、ケブコウマメザクラを発見した。よって、石灰岩地以外にも分布することが明確になったので発表した（里見 2011）。いずれにしても分布の少ない一品である。



第6図 ミヨウギシダ

### 5. チャツボミゴケ

*Solenostoma vulcanicol* (Schiffner) Nyushko

2017年5月、ぐんま鉱山研究会のメンバーによる中丸鉱山跡（1959年頃閉山）の調査の帰途、坑口から流れ出ている水が流れ落ちる擁壁に、緑鮮やかなコケが着生しているのを発見した。強酸性の水に育つこのコケは、中澤和則・古木達郎により、チャツボミゴケと判明した（中澤ほか 2019）。チャツボミゴケの多くは火山地帯の強酸性の水の流れの中やその周辺に分布し、群馬県北部には分布が見られるが、火山地帯でない下仁田町では鉱山跡地の硫化鉱物の酸化から生じる酸性水に育っているとみられ、まれな例に属している。現地では鉄鉱物の沈殿堆積も見られ、大切に保護したい場所となっている。

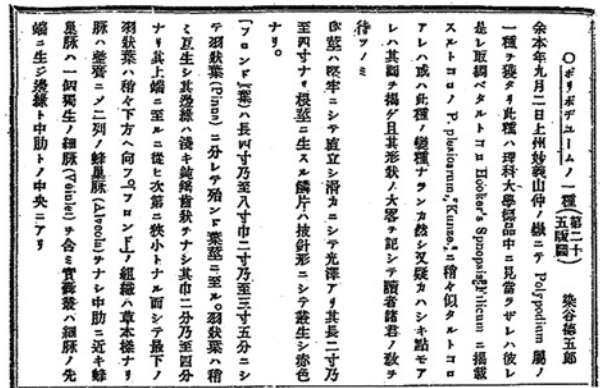
### 6. ミヨウギシダ（ウラボシ科）

*Polypodium someyae* Yatabe

第6図 口絵1-①

本種は、信越線が横川まで開通した1885（明治18）年の2年後、1887（明治20）年に妙義山中の岳で発見されたシダ植物で、発見者は染谷徳五郎である。発見時は種名不明とされたが、4年後の1891（明治24）年東京帝国大学植物学教授矢田部良吉によって新種ミヨウギシダと命名された。発見者染谷徳五郎の経歴は不明で、「日本の植物学百年の歩み」（日本植物学会 1982）でも履歴不明と記述されている。その経歴を今まで追い求めてきたところ、東京帝国大学在学中に発見したことを突き止めることができた。発表文献には発見者の氏名のみ記載されて

七十四百二 號一十第誌雜物種



第7図 ミヨウギシダの記録 染谷（1887）より

いた（第7図）。

その後「村井三郎 岩手植物の会会報 No.11P.36 1971 染谷徳五郎先生の面影」で、ミヨウギシダ発見当時のことを知ることができた。以下にその一部を紹介する。

「先日岩手県教育委員会で、染谷徳五郎先生の履歴書を閲覧する機会を与えられたので、その一端を紹介しよう。本籍は東京、1859（安政6）年4月8日

生まれ、1888(明治21)年東京帝国大学理学部植物学科修了、同22年東京高等女学校、山形県立尋常中学校、陸軍中央幼年学校、東京府城北中学校、東京第四中学校を歴任、同35年岩手県立師範学校教諭となり、大正6年病気退職、その後、囑託として約1年教鞭をとられた。岩手師範を退職されたのち、東京へ帰られたようであるが、その後の消息は不明である。」

近年になり群馬師範学校の同窓生名簿の1881年10月第七回卒業の欄に、染谷徳五郎の名前をみつけた。村井の報告した染谷徳五郎の履歴に当てはめると、年齢と経歴が一致し、同一人物であろうと確認を得た。文献より採集地を探し、一箇所自生地を見つけることができた。ミョウギシダを知って以来60余年の月日が経過する。染谷徳五郎の経歴を調べ続けること60有余年となり、履歴の発見につながったと確信している。

#### 7. ミョウギコザクラ (ミョウギイワザクラ) (サクラソウ科)

*Primula reinii* Franch. et Sav. var. *myogiensis* H.Hara

コイワザクラの変種で、葉はごく浅く切れ込む。

#### 8. ミョウギカラマツ (キンポウゲ科)

*Thalictrum minus* L. var. *chionophyllum* (Nakai ex F.Maek.) Emura

アキカラマツの変種で、小葉の裏面が著しく白色となり、岩場に生育する。

#### 9. ミョウギモミジカラマツ (キンポウゲ科)

*Trautvetteria caroliniensis* (Walter) Vail f. *breviloba* (Nakai) Yonek.

モミジカラマツの品種として記載されたが、現在区別されていない。

#### 10. ミョウギトリカブト (センモドキ×ツクバトリカブト× *Aconitum* sp.) (キンポウゲ科)

*Aconitum* × *suspensum* Nakai

岩場に垂れ下がっている。「日本の野生植物 II」(佐竹ほか 1982) では *Aconitum suspensum* Nakai

の学名を使用している。

#### 11. ミョウギシャジン (キキョウ科)

*Adenophora divaricata* Franch. et Sav. var. *petrophila* (H.Hara) H.Hara

ヒメシャジンの変種で、葉は一部または全部が輪生し、披針形で先が鎌形に湾曲する。荒船山にはヒメシャジンがある。

#### 12. ツルビランジ (ナデシコ科)

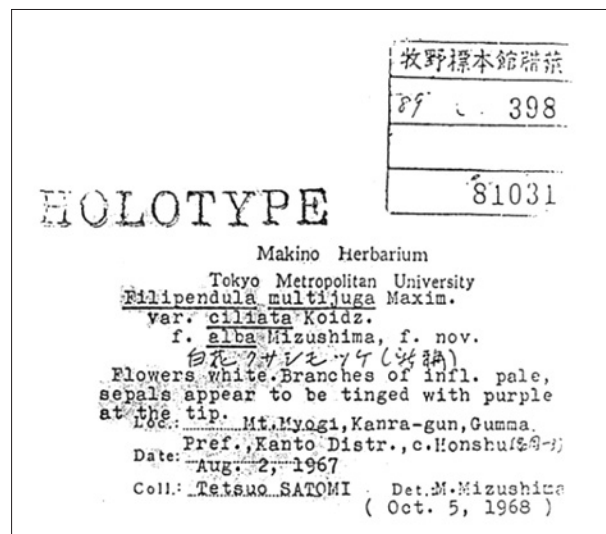
*Silene Keiskei* Miq. f. *procumbens* (Takeda) Ohwi et H. Ohashi

オオビランジの品種で、茎は長く蔓状に岩場に垂れ下がる。

#### 13. シロバナクサシモツケ (バラ科)

*Spiraea japonica* L. var. *japonica f. aliflora* (Miq) Kitam.

1968年里見が妙義山中で、全草緑色で、白花のシモツケソウを採集し、1967年に水島正美氏に同定を依頼したところ、シロバナクサシモツケと新称された(第8図)。発表されずに逝去された。文献によると、その後、北村が白花の一品をシロバナシモツケと発表している。ことによると同一種かもしれない。もしも、発表されていればシロバナクサシモツケとなったであろう。



第8図 牧野資料館 標本資料



#### 14. オオバナポントクタデ (タデ科)

*Persicaria pubescens* (Blume) H.Hara  
f. *macrantha* M.Mizush.

水島 (1953) に「里見氏の採集品中に大花のポントクタデがあった。常形は瘦果が 2.5~3.5 mm 長であるが、妙義嶺の一形では 4.5 mm ある。しかし、他の形質は明らかにポントクタデの変化範囲内にあると思えるので、これを一極端形とみなし、オオバナポントクタデとした。なおオオバナとしたのは、瘦果が美しい宿萼に全く包まれているのを花と見立ててのことである。」と記されている。

#### 15. モノガタリナズナ (アブラナ科)

*Draba sakurarii* Makino var. *nipponica* (Makino)  
Takeyda

1980年、里見は下仁田町南野牧の標高 600 m の新第三紀本宿層の岩場からクモマナズナを採集した。本県初記載であった。その後、渡邊 (1958) が同種を栽培し、花茎の葉腋より小花枝を分枝する一品のあるのに気づいた。現地調査の結果、新品種としてモノガタリナズナと命名した。

#### 16. ベニマメヅタラン (ラン科)

*Bulbophyllum drymoglossum* Maxim. ex Okubo  
f. *atrosanguiflourum*. et Satomi

1956年7月に採集したマメヅタランは、帯暗紅色の花を付けているので、金沢大学の里見信生に標本を送付した。採集地は平滑花崗岩の岩場で、マメヅタランの一品種として発表された。分布上にも北限に近く、注目を浴びた。群馬県初記載でもあった (正宗・里見 1957)。

#### 17. キレバノジスミレ (スミレ科)

*Viola yedoensis* × *eizanensis*

命名者名記入なく、上記のまま記してある。これが学名となっている。

1964年4月、神津牧場で菊葉型のスミレを採集、スミレの研究者浜栄助に標本を送り、周辺のスミレのリストを送付し、翌年現地を案内した。エイザンスミレとノジスミレの雑種、キレバノジスミレで、

分布は群馬県と東京都 (八王子市恩方)。浜 (1975) は図入りで掲載している。

#### 18. イワウラジロ (イノモトソウ科)

*Aleuritopteris Kramerii* (Franch et Sav.) Ching

本種は、東京・埼玉・群馬の3県のみで報告されている希少種である。分布のきわめて少ない植物で、最初、叶山で採集した。全長 25 cm 程の立派なものがあつた。同定は東京大学農学部の倉田悟で、その後、奥多摩でも見つけた。近年、下仁田の石灰岩地でも見つけている。県内初記載の植物である。叶山の開発に伴って、その一部は叶山の見本園に植栽されている。

#### 19. カナワラビ (オシダ科)

*Arachniodes rhomboidea* (Wall. et. C.Presl)  
Ching

本種の分布は、関東以西から九州と言われている。2004年、産業廃棄物処分場建設計画問題での調査依頼を受け、調査中に見つけた。群馬県では初記載である。

#### 20. シシラン (イノモトソウ科)

*Haplopteris flexuosa* (Fee) E.H.Crane

シダ類のイノモトソウ科の一種。常緑で関東地方以西の暖地に分布する。千葉・茨城県等には分布するが、内陸部の群馬県では下記の他に分布が見られない。1953年に土谷沢で発見した箇所は、道路拡張によって姿を消した。下仁田・南牧にあるが分布上大変珍しい。群馬県では初記録である。

#### 21. ヤマクラマゴケ (イワヒバ科)

*Selaginella tamamontana* Serizawa

イワヒバ科のシダで、里見は1955年採集し研究者に同定を依頼したが種不明でいた。その後、愛知大学の芹沢俊介によってヤマクラマゴケと命名された。「日本の野生植物 シダ」(岩槻 1992)によると、ヤマクラマゴケは石灰岩地に固有とあるが、里見の調査によると安山岩、凝灰角礫岩等にも着生し、石灰岩地のほうがむしろ少ない。標高 200 m

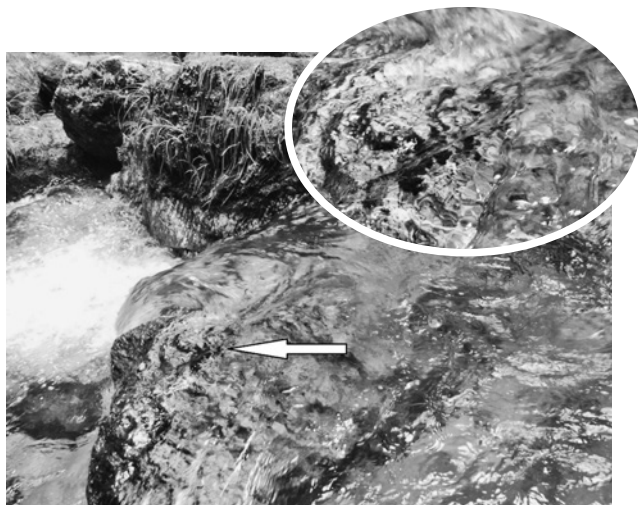


の岩場でも生育している。関東地方以外では記録されていない。

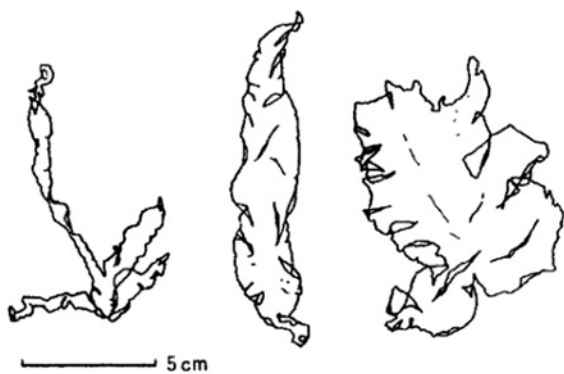
## 22. カワノリ

*Prasiola japonica* Yatabei

第9図 第10図 口絵1-③



第9図 カワノリ



カワノリの外形

第10図 スケッチ堀越武男  
2010年白石工業白艶華工場見学会資料

カワノリは、1891年に矢田部良吉によって命名された日本特産の種である。県内では桐生川と青倉川が著名で、青倉川のカワノリは1911年の記載が最初である。県内の研究者に小林一雄、伊藤市郎、橋本達夫らがいた。下仁田の鏑川水系では屋敷川、道平川、矢沢川、馬居沢川、千沢川、栗山川、桑本川、土屋川、後川、七久保川等が記録されたが、現在は

激減して姿を消した河川が多い。青倉川のカワノリは、テレビ等でも放映されたことがある。

## 消えゆく植物

1. 森林・原野・畑等で、姿を消していく植物がめだつ。主な原因には手入れ不足、除草剤の多量散布等があげられる。原野ではノカンゾウ、畑ではイヌノフグリが姿を消している。
2. 樹木や林床の植物がシカの食害にあっている。樹木ではスギ、ヒノキ、サクラ、リョウブ、ナツツバキ、ウリハダカエデ等が目立つ。近年ではアオキの食害が目立ち、幹や枝だけになっている。草本では、林床の食害によって裸地化し、消えていく希少種が目立ってきた。ヒイラギソウ、ギンバイソウ、ヤワタソウ等がある。

## 謝 辞

植物の同定や種々のご懇切なご指導をいただきました。伊藤 洋、水島正美、倉田 悟、邑田 仁の各先生方に大変お世話になりました。本報告に際しては、校正、整理等々本論を執筆するにあたって磯田喜義、和田晴美先生に大変お世話になりましたことを併せて深謝もうしあげます。

## 引用文献

- 岩槻邦男 (1992) 日本の野生植物 シダ. 平凡社, 196p.  
 岩槻邦男・D.E.Boufford・大場秀章 (2006) Flora at Japan II a Angiospermae Dicotyledoneae Archichlamydae, 講談社, 550p.  
 浜 栄助 (1975) 原色日本のスミレ. 成文堂新光社, 280p.  
 叶山自然環境調査会 (1984) 叶山自然環境調査報告書.  
 牧野富太郎 (1989) 改訂増補 牧野新日本植物図鑑. 北隆館, 1453p.  
 正宗巖敬・里見信生 (1957) マメヅタランの一品 A new form of *Bulbophyllum Drymoglossum* Maxim. 植物研究雑誌, 32, 95-96.  
 水島正美 (1953) オオバナボントクタデ. 植物研究雑誌, 33, 145-145p.  
 村井三郎 (1971) 染谷徳五郎先生の面影. 岩手植物の会会報, 11, 36.

- 中澤和則・菅原久誠・趙美超・中島啓治・和田晴美 (2019) 中丸鉦山浸出水沈殿物上のコケ植物. 下仁田自然史館研究報告, 4, 1-8.
- 日本植物学会 (1982) 日本の植物学百年の歩み: 日本植物学会百年史. 日本植物学会, 280p.
- 佐鳥英雄 (1981) 桐生市植物誌 (桐生地誌: 第1集). 桐生市教育委員会, 257p.
- 佐竹義輔・原寛・亙理俊次・富成忠夫 (1989) 日本の野生植物 木本1. 平凡社, 321p.
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亙理俊次・富成忠夫 (1982) 日本の野生植物2 草本 離弁花類. 平凡社, 604p.
- 里見哲夫 (2011) Field Biologist, 群馬野外生物学会.
- 下仁田町森林組合 (2021) 下仁田町森林組合2021資料 (森林構成表).
- 染谷徳五郎 (1887) ポリポヂユームノ一種. 植物学雑誌, 1,

- 247.
- 渡邊定元 (1958) 植物地理・分類研究. 第31巻第2号.

## 参考文献

- 岐阜県植物刊行会 (1966) 岐阜県の植物. 大衆書房, 407p.
- 林 弥栄 (1969) 有用樹木図説 林木編. 誠文堂新光社, 472p.
- 川崎哲也 (1993) 日本の桜. 山と溪谷社, 383p.
- 北村四郎・村田 源 (1979) 原色日本植物図鑑 木本編II. 保育社, 545p.
- 群馬県植物誌編集委員会 (1968) 群馬県植物誌. 群馬県高等学校教育研究会生物部会, 356p.
- 米倉浩司 (2012) 日本維管束植物目録. 北隆館, 379p.

## (要 旨)

里見哲夫 (2022) 下仁田町で大切にしたい植物. 下仁田町自然史館研究報告, 7, 1-10.

下仁田町は、地質的に著名な箇所が多く、火山活動に関係ある妙義山にはここで変異した植物がある。また、南西部の古生層地域や石灰岩地等にも、特有な植物が分布している。他、各地域の山々の尾根一帯にはツツジ類が多い。これら一帯は特に保全に留意して、末永く町の活性化に役立つことを望むものである。